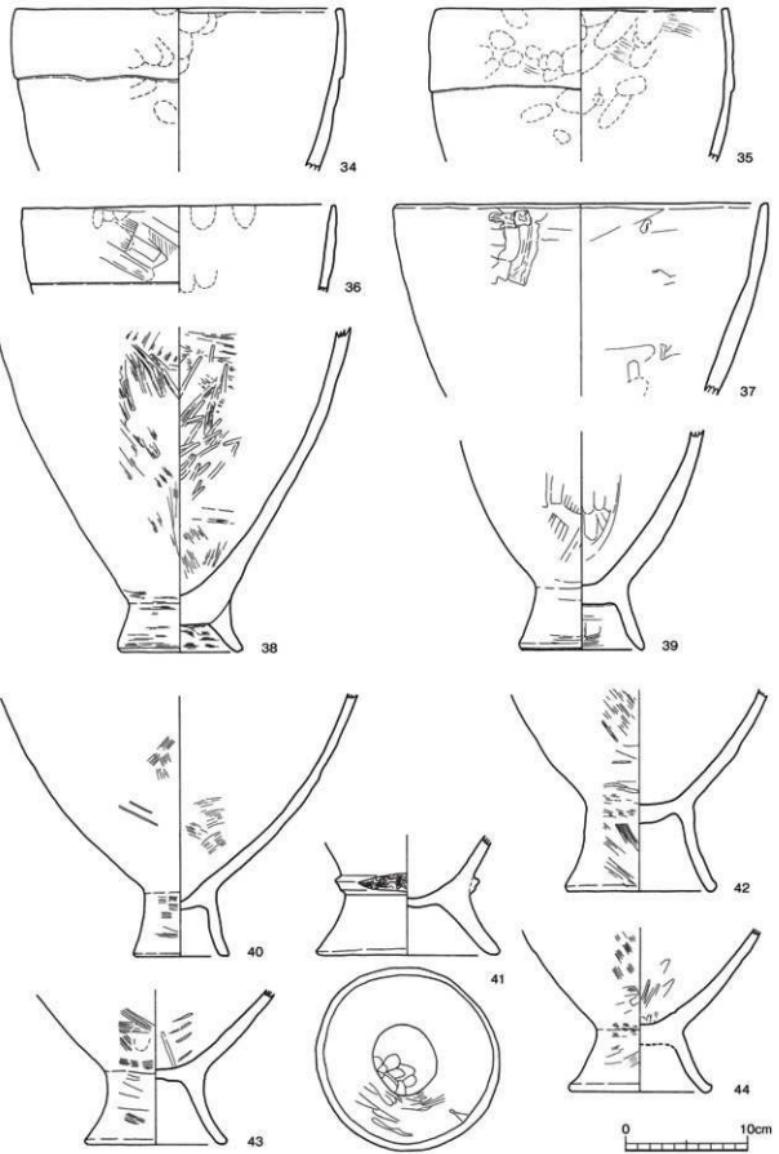


第213図 變形土器第三類(3)



第214図 變形土器第三類(4)

ら直行する口縁部をもつ器形の土器である。器面調整は内面がヨコナデで、外面は口縁部がタテナデで頸部はヨコナデである。色調は内外面とも暗赤茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。50は頸部から直行する口縁部をもつ丸肩の器形の土器である。器面調整は内面の頸部が指圧で他はヨコナデである。外面は研磨気味のヨコナデである。色調は内面が赤茶褐色で、外面は明茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。55は頸部から直行する口縁部をもつ撫で肩の器形の土器である。器面調整は内面がヨコナデである。外面は研磨気味のタテナデである。色調は内外面とも茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含んでいる。49は頸部以上が欠損した小型の壺形土器である。器形は肩部が張り位置が高く、底部は丸底である。外面の器面調整は肩部がヨコナデ、胴部がタテナデ、底部はナデである。内面の器面調整は斜めのナデである。色調は内外面とも茶褐色で、部分的に黒色斑がみられる。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。54は頸部の長い壺の口縁部である。頸部は直行し口縁部が外反する器形である。外部の器面調整は口縁部がヨコナデで頸部がタテナデである。内面の器面調整はヨコナデである。色調は内面が明茶褐色で、外面は茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石である。57は無頸壺である。文様は口縁部に浅い沈線が2条みられる。器面調整は内外面ヨコナデである。色調は外面が茶褐色で、内面が暗茶褐色である。胎土は粒子が細かく、石英、長石、角閃石がみられる。

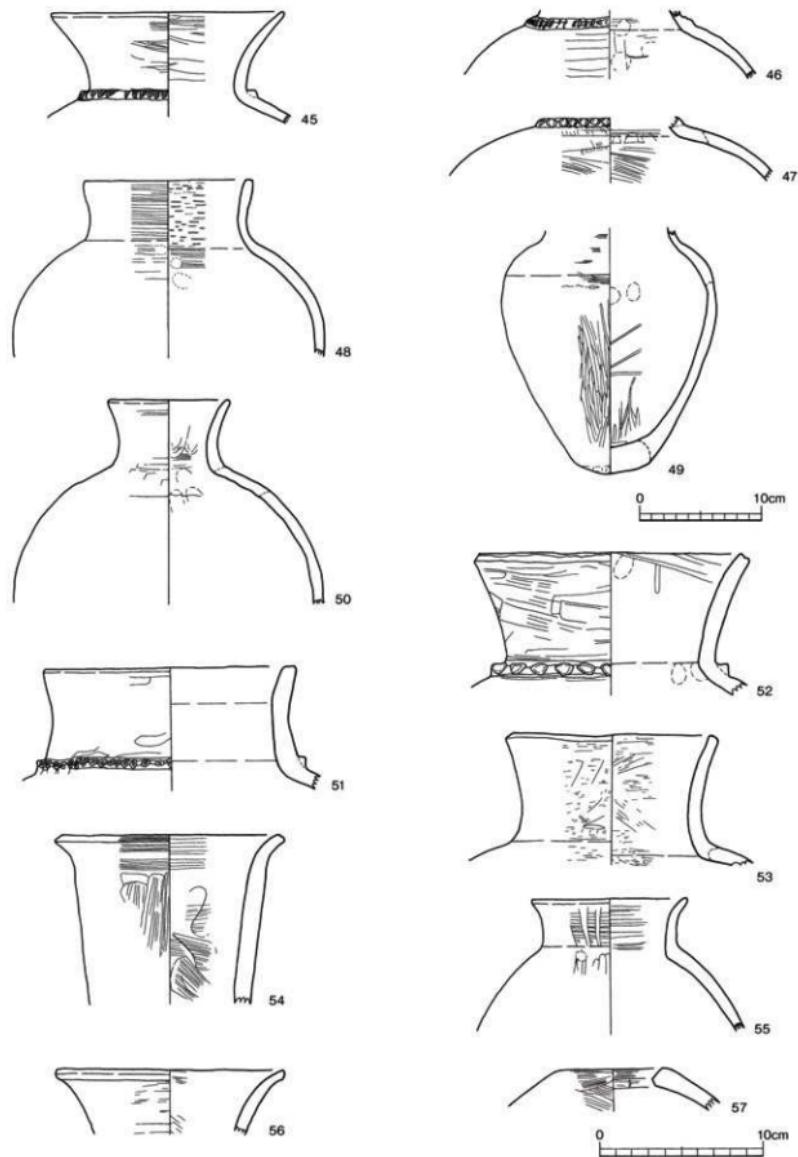
58から70は幅広突帯の類である。59は鋸歯状で、60・61は竹管文、58・62・65～70は竹管文と鋸歯文、63は綾杉状に64はメッシュ状に施した文様をもつ土器片である。器面調整は研磨状にナデている。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。

71から81は壺形土器の底部である。器形的に次のように分類される。71・72は尖り底で、74は丸底、73・75・76は平底で、77～79は厚みを出した平底で、80・81は角をもつ底部である。器面調整は73が研磨気味で、他はナデ調整である。色調は73が赤茶褐色で、他は茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。

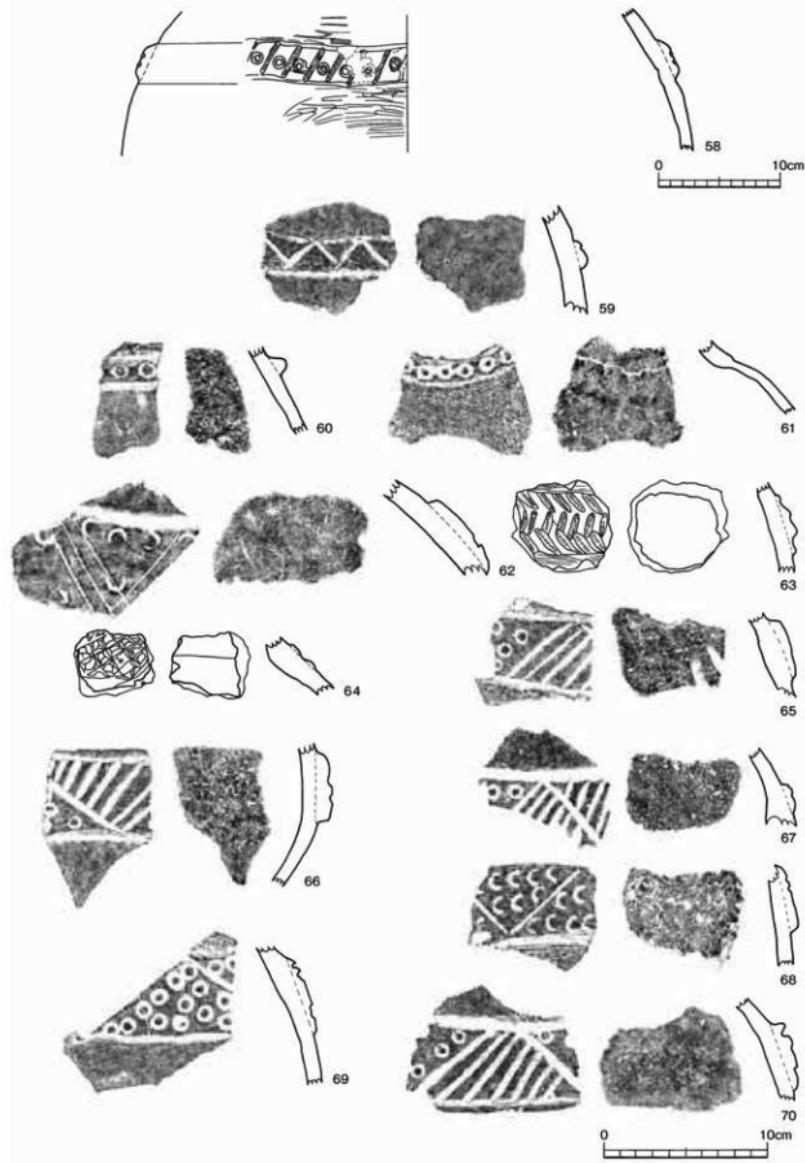
鉢(第218図・219図 82～96)

82は大きく開いた短めの脚をもち外弯気味に大きく開いた口縁部をもつ器形の土器である。底部にはヘソ状の突起がみられる。器面調整は外面底部が丁寧にヨコナデされ、胴部から口縁部もタテナデやヨコナデを研磨気味に施している。内面は口縁部がヨコナデで見込みは指圧や粗いタテナデを施している。内面の色調は口縁部が茶褐色で見込みが灰褐色である。外面は茶褐色である。また、外面胴部と見込みに黒斑がみられる。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。用途としては蓋の可能性もある。83は口唇部が欠損しているが82と同様な器形である。底部のヘソは文様状に巻き上げてつくり、脚部は多角状に整形している。器面調整は内外面とも研磨状のタテナデである。色調は外面が暗茶褐色に黒斑がみられ、内面は口縁部が茶褐色で見込みは暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。用途としては蓋の可能性もある。88は82と同様な器形である。底部のヘソは低くつくり、脚部は多角状に整形している。器面調整は内外面ともヨコナデである。色調は外面が暗茶褐色に煤の黒斑がみられ、内面は口縁部が茶褐色で見込みは灰茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。用途としては蓋の可能性もある。

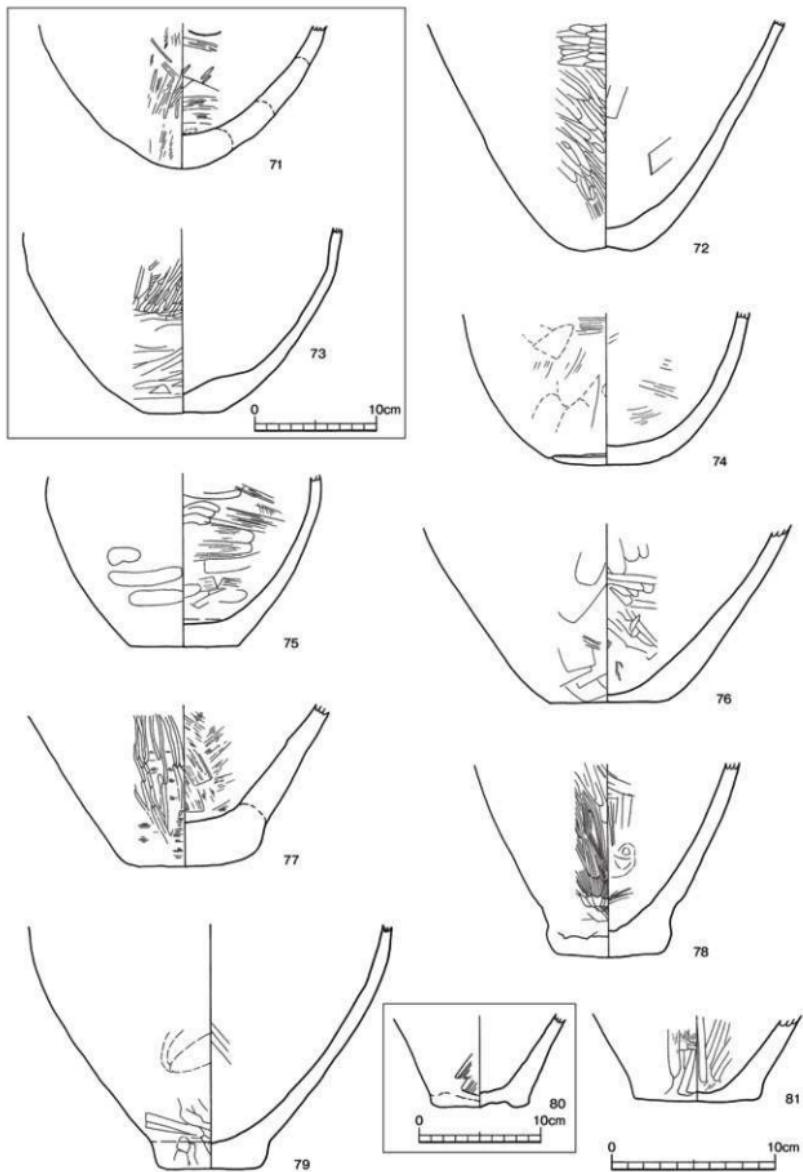
84は脚部が欠損しているが平坦な底から球状に胴部をつくり、頸部で段を付け外反する口縁部をもつ土器である。器面調整は、口縁部の外面がヘラで搔き上げ、胴部はヨコナデである。内面



第215図 壺形土器第I類(1)



第216図 壺形土器第I類(2)



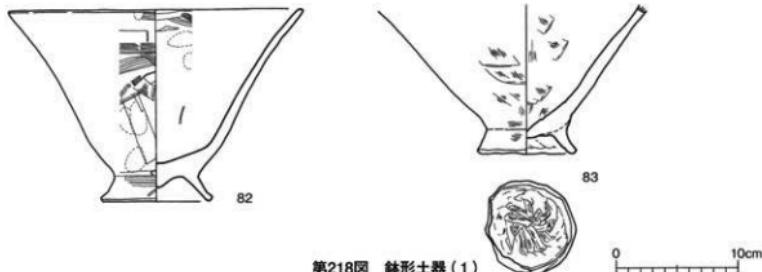
第217図 叠形土器第I類(3)

の口縁部はヨコナデで、見込みはタテナデである。色調は外面が赤茶褐色で、内面が赤茶褐色の上に黒色の煤や焼けて白色化した筋が口縁部にみられる。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。85は球状の胴部の上に頸部で「く」の字状に折れた口縁部をもつ器形の土器である。器面調整は口縁部がヨコナデで胴部がタテナデである。色調は外面が茶褐色で、内面が茶褐色に黒色の斑点がみられる。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。86は脚部が欠損しているが平坦な底から直線状に胴部をつくり、頸部でやや外反する口縁部をもつ土器である。器面調整は、口縁部の外面がヨコナデで、胴部はタテナデである。内面の口縁部はヨコナデで、見込みはタテナデである。色調は外面が赤茶褐色で、内面が赤茶褐色の上に灰色の斑点がみられる。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。92は低い高台で碗状の器形の土器である。脚部の貼り付け方は指で雑に付けている。器面調整はヨコナデである。色調は内外面とも灰茶褐色に黒斑がみられる。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。89は高く開いた脚部をつけた碗状の器形をもつ土器である。脚部の中央部は尖ったヘソを付けている。器面調整はヨコナデである。色調は内面が灰茶褐色に黒斑がみられ、外面は茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。90は口縁部が内湾した球状の胴部に直行した脚部を付けている器形の土器である。器面調整は脚部がタテナデで胴部がナナメナデである。色調は暗茶褐色で、一部に黒斑がみられる。87は低い高台で碗状の器形の土器である。脚部の貼り付け方は指で雑に付けている。器面調整はタテナデとナナメナデである。色調は内外面とも灰茶褐色に黒斑がみられる。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。94は平底で球状の器形をもつ土器である。器面調整は研磨状の丁寧なヨコナデである。色調は内面が暗茶褐色で外面が黒褐色である。

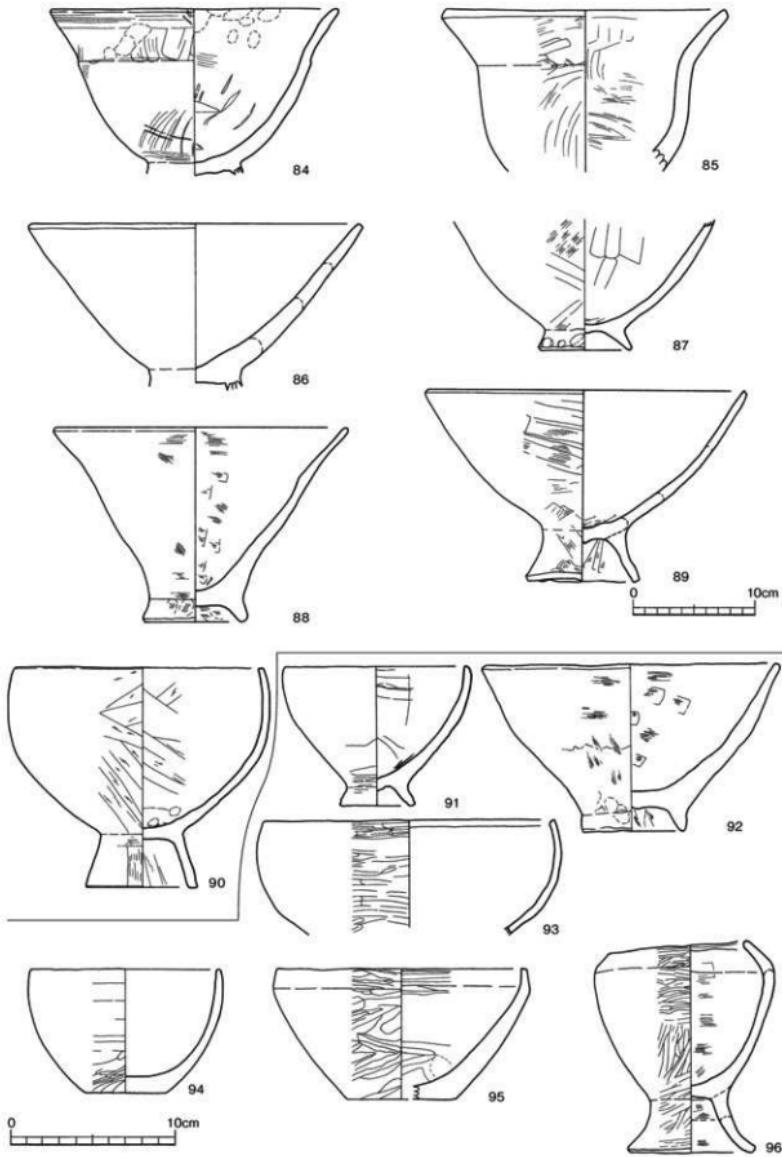
胎土は石英、長石、角閃石がみられる。95は平底で球状の器形をもち、口縁部が直行する土器である。器面調整は研磨状の丁寧なヨコナデである。色調は内面が暗茶褐色と黒斑で外面が赤黒褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。96は95の様な鉢に大きく開いた脚をもっている土器である。器面調整は研磨状の丁寧なヨコナデである。色調は内面が暗赤茶褐色で外面が暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。

高坏(第220図 97~113)

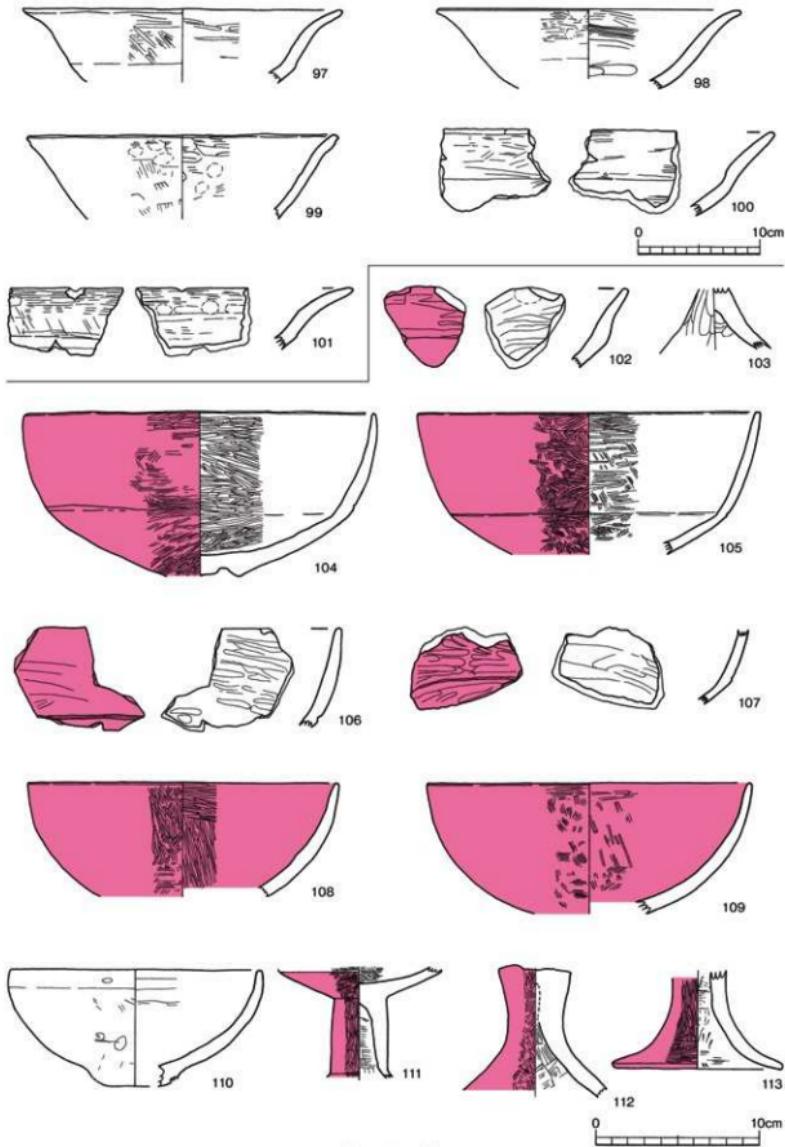
97は坏の肩部より口縁部が外反する器形である。器面調整は外面の口唇部がヨコナデ、坏部がナナメナデである。内面はヨコナデである。色調は外面が茶褐色で、内面が黒色と茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。98は球状の坏部で口縁部が外反する器形である。器面調



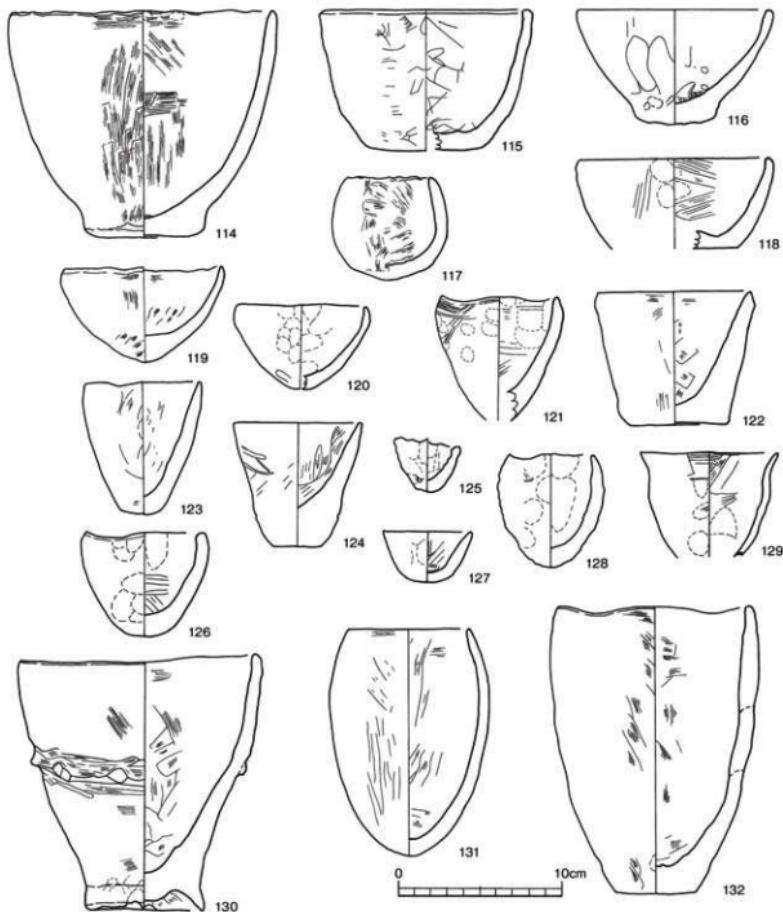
第218図 鉢形土器(1)



第219図 鉢形土器(2)

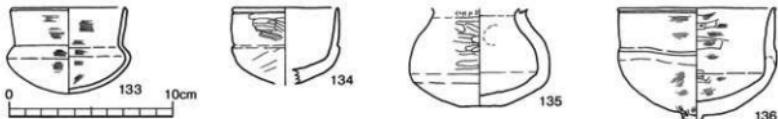


第220図 高环



第221図 ミニチュア土器

整は内外面ともヨコナデである。色調は外面が暗茶褐色で、内面が黒色と暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。99は外反する口縁部をもつ壊部である。器面調整は外面の口唇部がヨコナデ、壊部がタテナデである。内面はヨコナデである。色調は内外面が明茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。100は肩部より口縁部が外反しする器形である。器面調整は外面の口唇部がヨコナデ、壊部がナナメナデである。内面はヨコナデである。色調は内外面とも明茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。103は円錐状の脚部である。器面調整は継研磨である。色調は黄褐色である。胎土は細砂である。

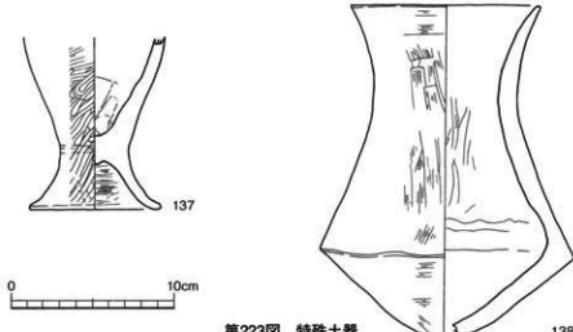


第222図 小型丸底壺

104~109・111~113は外面に丹塗磨研を施した土器である。器形は碗形の壺部である。脚部は111の筒形と112、113の円錐形がみられる。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。104は壺部の中位に沈線を施している。器面調整は内外面研磨である。外面の色調は暗赤茶褐色の丹塗り磨研の上に煤が付着し、黒色の斑点がみられる。内面は茶褐色と灰茶褐色の中に黒斑がみられる。105は104と同様な器形、器面調整である。色調は外面が赤茶褐色で、内面が茶褐色である。106と107は105と同様である。108は壺部に沈線がない。器面調整は外面が継研磨と横研磨で内面が口縁部に横研磨、見込みに継研磨を施している。109も108と同様であるが研磨筋の長さが短い。111は壺部から筒部までである。器面調整や色調は109と同様である。112・113は脚部である。器面調整や色調は111と同様である。110は広口の鉢である。色調は橙褐色である。

ミニチュア土器(第221図 114~132)

この土器類は小鉢状のもので、壺や壺や鉢を簡単に模式して小型に作ったものである。114は鉢である内外面とも継研磨である。色調は暗茶褐色である。115は鉢で、色調は茶褐色である。底部に煤の付着がみられる。116も鉢である。色調は灰茶褐色に黒斑がみられる。119は尖り底の土器である。色調は茶褐色である。117は球状の器形の土器である。色調は黒茶褐色である。118は広い平底の鉢である。底部が黒色で口縁部は暗茶褐色である。123は壺の胴部以下を模した器形である。色調は明茶褐色である。120は尖り底の土器である。色調は茶褐色で底部が黒色である。121は波状口縁で尖り底である。色調は茶褐色である。122は平底でコップ状のものである。色調は明茶褐色である。126は丸底の土器である。色調は暗茶褐色で底部が黒色である。124は平底の土器である。色調は暗茶褐色で底部が黒色である。125は尖り底の土器である。色調は黒茶褐色である。127は丸底の土器である。色調は茶褐色である。128は尖り底の土器である。色調は茶褐色で底部が黒色である。129は壺形土器を模した器形の土器である。色調は茶褐色である。130は



第223図 特殊土器

突帯を巡らした壺形土器を模した小型のものである。色調は暗茶褐色である。131は壺形土器の肩部以下を模した尖り底の土器である。色調は茶褐色で底部が黒色である。132は壺形土器の肩部以下を模した平底の土器である。色調は茶褐色で底部が黒色である。

小型丸底壺(第222図 133~136)

133は薄手の土器である。器形は球状の胴部に直行した口縁部をついている。器面調整は丁寧なナデ調整で、色調は外面の口縁部が灰黄茶褐色で、底部が黒色である。内面は灰黄茶褐色である。胎土は砂を除いた粘土を使っている。134は133と同様な器形をしているが、胎土は粗い土を使い、器面は丹塗り摩研を施している。133の模造品も考えられる。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。136は134と同様に粗い粘土を使い模造している器形である。底部に蓋の紐と思われる突起があり、蓋の用途も考えられる。色調は茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。135は球状の胴部で頸部が縮まる器形である。器面調整は横研磨気味である。色調は外面が茶褐色で、黒斑がみられる。内面は茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。

特殊土器(第223図 137~138)

137は鉢形土器に脚部を付けたものである。色調は茶褐色である。

138は胴部がソロバン玉の形に広口の長頸をつけたものである。器面調整は継研磨と胴部が横研磨である。色調は暗茶褐色の中に黒斑がみられる。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。

第54表 古墳時代包含層出土遺物観察表(1)

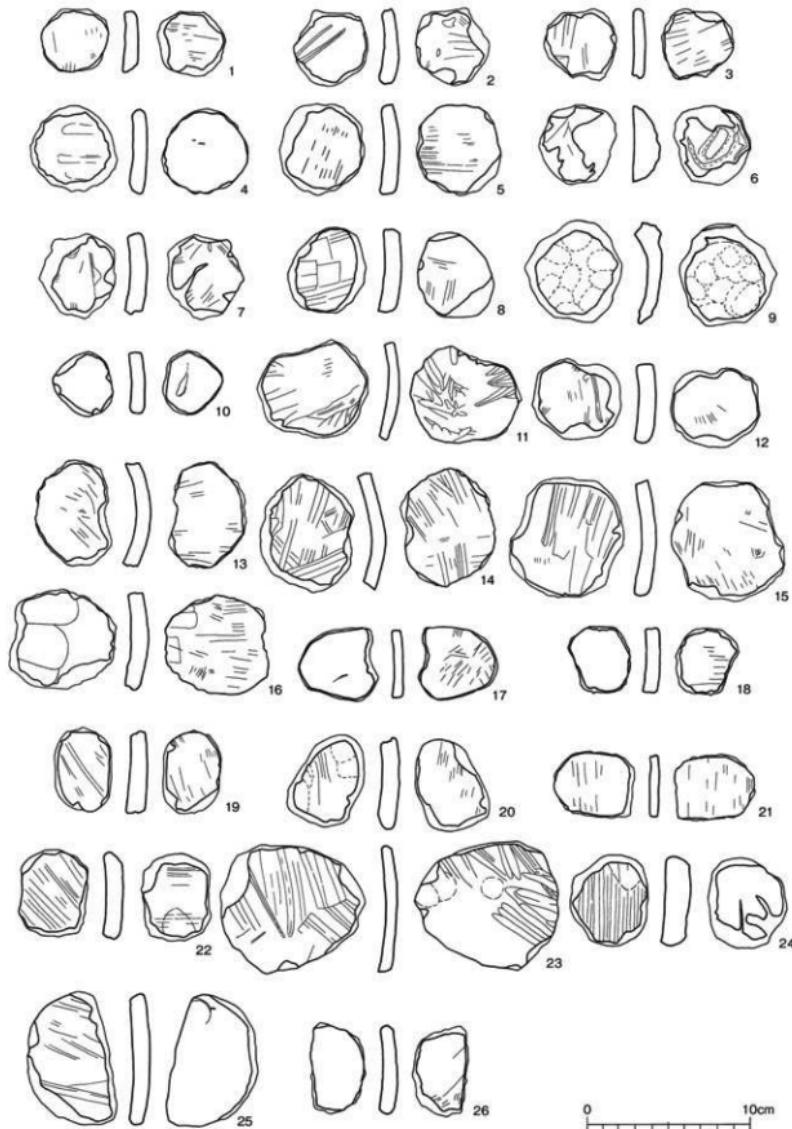
埠固	番号	層位	器種	類	部位	口径・底径・高さ			調整・文様		色調		胎土	備考
						口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面		
209	1	Ⅲ a	唐	I	実形	32.2	10.4	37.3	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	2	Ⅲ a	唐	I	胴部~底部	—	10.4	—	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	3	Ⅲ a	唐	I	実形	23.4	7.7	25.2	ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	4	Ⅲ a	唐	I	口縁~胴部	23	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	5	Ⅲ a	唐	I	口縁~胴部	24.8	—	—	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	6	Ⅲ a	唐	I	口縁~胴部	31	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	7	Ⅲ a	唐	I	口縁~胴部	22.6	—	—	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—
210	8	Ⅲ a	唐	I	口縁部	40	—	—	ナデ	ナデ	暗赤茶褐色	赤茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	9	Ⅲ a	唐	II	口縁~胴部	42.6	—	—	ナデ	ナデ	暗茶褐色	赤茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	10	Ⅲ a	唐	II	口縁~胴部	30	—	—	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—
211	11	Ⅲ a	唐	III	実形	26.8	10.6	29.5	ナデ	ナデ	暗茶褐色	明茶褐色	石英、長石、角閃石	外面に保付箇
	12	Ⅲ a	唐	III	口縁~胴部	24	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	外面に保付箇
	13	Ⅲ a	唐	III	口縁~胴部	27.4	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	外面に保付箇
	14	Ⅲ a	唐	III	口縁~胴部	20.4	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	15	Ⅲ a	唐	III	口縁~胴部	36	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色、黒褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	16	Ⅲ a	唐	III	口縁~胴部	29.4	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	17	Ⅲ a	唐	III	口縁~胴部	28	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色、黒	暗茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	18	Ⅲ a	唐	III	口縁~胴部	19.6	—	—	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—
	19	Ⅲ a	唐	III	口縁~胴部	32	—	—	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英、長石、角閃石	—

第55表 古墳時代包含層出土遺物觀察表 (2)

種目	番号	層位	器種	期	部位	口径・底径・高さ				調整・文様		色調	胎土	備考	
						cm	cm	cm	外面	内面	外面	内面			
212	20	Ⅲ a	甕	Ⅱ	口縁~腹部	27	—	—	ナデ	ナデ	明茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	21	Ⅲ a	甕	Ⅱ	口縁~腹部	33.2	—	—	ナデ	ナデ	結茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	22	Ⅲ a	甕	Ⅱ	口縁~腹部	38.8	—	—	ナデ	ナデ	暗赤茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	23	Ⅲ a	甕	Ⅱ	変形	28	9.6	25.1	ナデ	ナデ	茶褐	明茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	24	Ⅲ a	甕	Ⅱ	口縁~腹部	31.2	—	—	ナデ	ナデ	結茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	25	Ⅲ a	甕	Ⅱ	口縁~腹部	29.6	—	—	ナデ	ナデ	茶褐	明茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
213	26	Ⅲ a	甕	Ⅱ	口縁~腹部	29.4	—	—	ナデ	ナデ	結茶褐	明茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	27	Ⅲ a	甕	Ⅲ	三形	31.8	11.2	34	ナデ	ナデ	明赤茶褐	明茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	28	Ⅲ a	甕	Ⅲ	口縁~腹部	25	—	—	ナデ	ナデ	結茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	29	Ⅲ a	甕	Ⅲ	口縁~腹部	32	—	—	ナデ	ナデ	結茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	30	Ⅲ a	甕	Ⅲ	口縁~腹部	33	—	—	ナデ	ナデ	茶	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	31	Ⅲ a	甕	Ⅲ	口縁~腹部	31.4	—	—	ナデ	ナデ	灰茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
214	32	Ⅲ a	甕	Ⅲ	口縁~腹部	27.4	—	—	ナデ	ナデ	青茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	33	Ⅲ a	甕	Ⅲ	口縁~腹部	38.4	—	—	ナデ	ナデ	暗赤茶褐	赤茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	34	Ⅲ a	甕	Ⅲ	口縁~腹部	27	—	—	ナデ	ナデ	結茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	35	Ⅲ a	甕	Ⅲ	口縁~腹部	23.8	—	—	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	36	Ⅲ a	甕	Ⅲ	口縁~腹部	25.6	—	—	ナデ	ナデ	結茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	37	Ⅲ a	甕	Ⅲ	口縁~腹部	23	—	—	ナデ	ナデ	結茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
215	38	Ⅲ a	甕	Ⅲ	銅~底部	—	10.2	—	ナデ	ナデ	茶褐	黑褐	石灰、長石、角閃石	—	
	39	Ⅲ a	甕	Ⅲ	銅~底部	—	10.3	—	ナデ	ナデ	赤茶褐	赤茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	40	Ⅲ a	甕	Ⅲ	銅~底部	—	8	—	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	41	Ⅲ a	甕	Ⅲ	銅~底部	—	14.7	—	ニガキ	ニガキ	黑褐、暗赤茶褐	茶褐、暗赤茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	42	Ⅲ a	甕	Ⅲ	銅~底部	—	12	—	ナデ	ナデ	赤茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	43	Ⅲ a	甕	Ⅲ	銅~底部	—	12	—	ナデ	ナデ	黑褐	赤茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
216	44	Ⅲ a	甕	Ⅲ	銅~底部	—	11.8	—	ナデ	ナデ	結茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	45	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	18.8	—	—	ナデ	ナデ	結茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	46	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	10.5	—	—	ニガキ	ナデ	指ササエ	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	47	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	10.6	—	—	ニガキ	ナデ	指ササエ	赤茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	48	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	13.8	—	—	丁寧なナデ	ナデ	指ササエ	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	49	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	—	—	—	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
217	50	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	10	—	—	丁寧なナデ	ナデ	指ササエ	明茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	51	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	15.4	—	—	ナデ	ナデ	暗灰茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	52	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	17	—	—	ナデ	ナデ	結茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	53	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	13	—	—	ナデ	ナデ	暗赤茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	54	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	13.3	—	—	ナデ	ナデ	茶褐	明茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	55	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	9.4	—	—	丁寧なナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
218	56	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	14	—	—	ナデ	ナデ	結茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	57	Ⅲ a	壺	I	口縁~腹部	6	—	—	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	58	—	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	茶褐	明茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	59	Ⅲ a	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	疊壓状	
	60	Ⅲ a	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	竹管文	
	61	Ⅲ a	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	竹管文	
219	62	97	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	茶褐	明茶褐	石灰、長石、角閃石	疊壓文、竹管文	
	63	Ⅲ a	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	疊壓文、竹管文	
	64	Ⅲ a	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	疊板状	
	65	Ⅲ a	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	明茶褐	明茶褐	石灰、長石、角閃石	メッシュ状	
	66	Ⅲ a	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	疊壓文、竹管文	
	67	イモ穴	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	結茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	疊壓文、竹管文	
220	68	—	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	茶褐	明茶褐	石灰、長石、角閃石	疊壓文、竹管文	
	69	Ⅲ a	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	明茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	疊壓文、竹管文	
	70	Ⅲ a	壺	I	幅広~突部	—	—	—	丁寧なナデ	ナデ	赤茶褐	赤茶褐	石灰、長石、角閃石	疊壓文、竹管文	
	71	Ⅲ a	壺	I	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	茶褐	赤茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	72	Ⅲ a	壺	I	底部	—	5.6	—	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	73	Ⅲ a	壺	I	底部	—	5.4	—	ニガキ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
221	74	Ⅲ a	壺	I	底部	—	6.6	—	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	75	Ⅲ a	壺	I	底部	—	6.6	—	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	76	Ⅲ a	壺	I	底部	—	7	—	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	77	Ⅲ a	壺	I	底部	—	8	—	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	78	Ⅲ a	壺	I	底部	—	7	—	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	
	79	Ⅲ a	壺	I	底部	—	6.6	—	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石灰、長石、角閃石	—	

第56表 古墳時代包含層出土遺物觀察表 (3)

辨認	番号	部位	基種	器種	口径 直径 基高			調整・文様		色調		胎土	備考	
					cm	cm	cm	外側	内側	外側	内側			
217	80	Ⅲ a	盤	口縁	7	底部	—	8	—	ナデ	ナデ	茶褐	相	石英、長石、角閃石
	81	Ⅲ a	盤	口縁	—	底部	—	7.4	—	ナデ	ナデ	茶褐	相	石英、長石、角閃石
218	82	Ⅲ a	鉢	口縁	—	宏形	24.2	9.2	15	丁寧なナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	83	Ⅲ a	鉢	口縁~底部	—	—	8	—	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
219	84	Ⅲ a	鉢	口縁~底部	—	—	23.8	—	—	ナデ	ナデ	赤茶褐	赤茶褐	石英、長石、角閃石
	85	Ⅲ a	鉢	口縁~側部	—	—	23.5	—	—	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	86	Ⅲ a	鉢	口縁~底部	—	—	27.3	—	—	ナデ	ナデ	赤茶褐	赤茶褐	石英、長石、角閃石
	87	Ⅲ a	鉢	頭~底部	—	—	7.2	—	—	ナデ	ナデ	灰茶褐	灰茶褐	石英、長石、角閃石
	88	Ⅲ a	鉢	口縁	—	宏形	24.2	8.6	15.9	ナデ	ナデ	暗茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石 外面に揮苔
	89	Ⅲ a	鉢	口縁	—	宏形	26.4	9.3	15.6	ナデ	ナデ	茶褐	反茶褐	石英、長石、角閃石
	90	—	鉢	口縁	—	宏形	20.5	9.2	16.5	ナデ	ナデ	暗茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石
	91	Ⅲ a	鉢	口縁	—	宏形	11.5	4.7	8.5	ナデ	ナデ	灰茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	92	Ⅲ a	鉢	口縁	—	宏形	18.2	6.4	10.2	ナデ	ナデ	灰茶褐	灰茶褐	石英、長石、角閃石
	93	Ⅲ a	鉢	口縁~側部	—	—	10	—	—	ミガキ	—	赤茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
220	94	Ⅲ a	鉢	口縁	—	宏形	11.6	4.8	7.6	丁寧なナデ	丁寧なナデ	茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石
	95	Ⅲ a	鉢	口縁~底部	—	—	15.2	6.5	8	ナデ	ナデ	赤茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石
	96	Ⅲ a	鉢	口縁	—	宏形	8.4	7.9	12.9	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石
	97	Ⅲ a	高杯	口縁	—	坪部	26.2	—	—	ナデ	ナデ	茶褐	黑・茶褐	石英、長石、角閃石
	98	Ⅲ a	高杯	口縁	—	坪部	24.5	—	—	ナデ	ナデ	暗茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	99	Ⅲ a	高杯	口縁	—	坪部	25.6	—	—	ナデ	ナデ	明茶褐	明茶褐	石英、長石、角閃石
	100	Ⅲ a	高杯	口縁	—	坪部	—	—	—	ナデ	ナデ	明茶褐	明茶褐	石英、長石、角閃石
	101	Ⅲ a	高杯	口縁	—	坪部	—	—	—	ナデ	ナデ	明茶褐	明茶褐	石英、長石、角閃石
	102	—	高杯	口縁	—	坪部	—	—	—	ナデ	ナデ	明茶褐	明茶褐	石英、長石、角閃石
	103	Ⅲ a	高杯	口縁	—	脚部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	黄褐	黄褐	赤色顔料
220	104	Ⅲ a	高杯	口縁	—	脚部	23.6	—	—	ミガキ	ミガキ	暗赤茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石 赤色顔料
	105	—	高杯	口縁	—	脚部	21	—	—	ミガキ	ミガキ	赤茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石 赤色顔料
	106	Ⅲ a	高杯	口縁	—	脚部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石 赤色顔料
	107	Ⅲ a	高杯	口縁	—	脚部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	赤茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石 赤色顔料
	108	Ⅲ a	高杯	口縁	—	脚部	19	—	—	ミガキ	ミガキ	赤茶褐	橙褐	石英、長石、角閃石 赤色顔料
	109	Ⅲ a	高杯	口縁	—	脚部	19.8	—	—	ミガキ	ミガキ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石 赤色顔料
	110	—	高杯	口縁	—	脚部	20.9	—	—	ナデ	ナデ	根褐	根褐	石英、長石、角閃石
	111	Ⅲ a	高杯	口縁	—	脚部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	暗赤茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石
	112	Ⅲ a	高杯	口縁	—	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	暗赤茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石 赤色顔料
	113	Ⅲ a	高杯	脚部	—	—	10.4	—	—	ミガキ	ナデ	暗赤茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石 赤色顔料
221	114	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	宏形	16.2	6.8	13.8	ミガキ+後ナデ	ミガキ+後ナデ	暗茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石
	115	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	底部	12.4	4.4	8.6	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石 底部に揮苔
	116	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	宏形	11.4	5	7	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	灰茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	117	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	宏形	5	—	6.3	ナデ	ナデ	更茶褐	更茶褐	石英、長石、角閃石
	118	—	ミニチャコア	口縁	—	底部	12.1	7.6	5.5	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	暗茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石
	119	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	宏形	9.9	5.8	5.8	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	120	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	底部	8.4	—	5.2	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	121	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	底部	7.2	0.8	—	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	122	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	宏形	9.4	6.7	8.2	ナデ	ナデ	工ナデ	明茶褐	石英、長石、角閃石
	123	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	宏形	7.2	2.5	8.1	ナデ	ナデ	明茶褐	明茶褐	石英、長石、角閃石
222	124	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	宏形	7.7	2.8	7.6	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	暗茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石
	125	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	宏形	4	—	3	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	126	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	宏形	7.8	1	6.4	ナデ・指オサエ	ミガキ+指オサエ	暗茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石
	127	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	宏形	5.4	1	3	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	128	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	宏形	5.2	—	6.9	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	129	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	脚部	8.5	—	—	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	130	—	ミニチャコア	口縁	—	底部	14.6	7	15.7	ナデ	ナデ	暗茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	131	—	ミニチャコア	口縁	—	底部	7.4	—	13.9	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	132	Ⅲ a	ミニチャコア	口縁	—	宏形	11.8	4.8	17.5	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	133	Ⅲ a	小型丸底壺	口縁	—	宏形	7.1	—	5.3	丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰茶褐	灰茶褐	石英、長石、角閃石
222	134	Ⅲ a	小型丸底壺	口縁	—	底部	6.6	—	—	ミガキ	ナデ・倒翫	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	135	Ⅲ a	小型丸底壺	口縁	—	底部	—	—	2.6	ミガキ	ナデ・倒翫	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	136	Ⅲ a	小型丸底壺	口縁	—	宏形	9.7	—	7	ミガキ	ミガキ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
	137	Ⅲ a	小型丸底壺	口縁	—	脚部	—	—	7.8	ミガキ	丁寧なナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石
138	—	広口瓶	口縁	—	底部	11.6	—	—	ミガキ	ナデ	暗茶褐	暗茶褐	石英、長石、角閃石	



第224図 円盤状土製品

第4節 古代の調査

本遺跡からは、古代期の明確な遺跡は検出されていない。遺構は検出されなかったが、少量ではあるが、明らかに古代期のものと判断できる須恵器が出土した。須恵器は、時期が判断しやすいことから、やや小片遺物であっても可能な限り実測をし、その中で、13点を図化した。

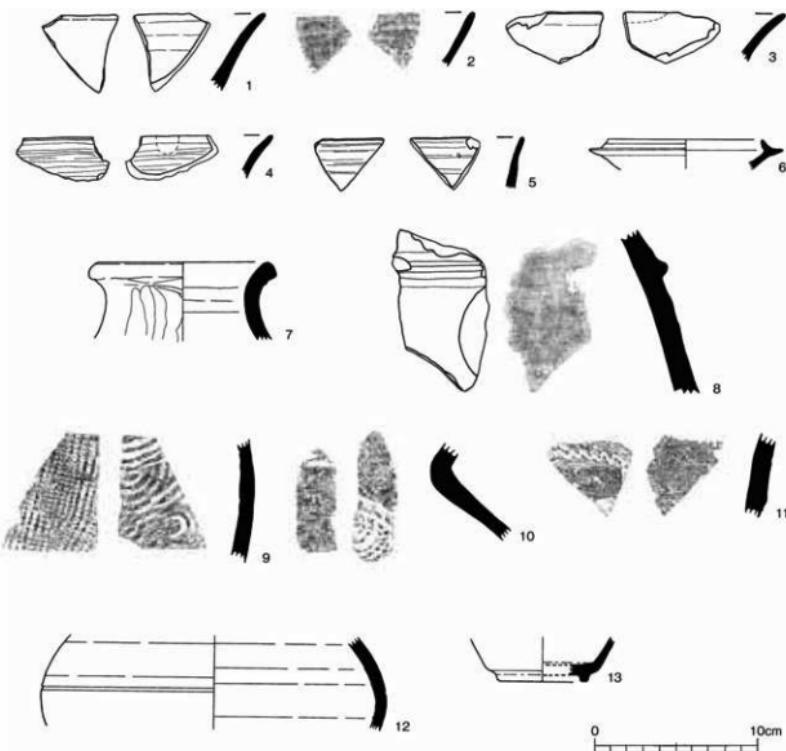
須恵器(第225図 1~13)

1~13は須恵器である。このなかでも6はTK209（もしくはⅡ型式第5段階）型式に該当するもので、6世紀~7世紀前半に位置づけられるものである。

1~6・13は壊である。ここでは、碗の可能性のあるものも一括して壊とした。

1~5は口縁部である。まっすぐに立ち上がるものと、やや丸みを帯びるものがある。13は底部である。高台を有するもので、箱形に近い形態を示すので、奈良時代後半~平安時代初頭の時期と考えられる。

7・8・12は壺である。7は、頸部外面付近に縱方向のケズリがみられる。8は、胴部の上半



第225図 古代須恵器

部に突帯を巡らすもので、そろばん玉状の器形を呈するものと考えられる。

9~11は壺である。9・10は外面に格子目タキ痕、内面に同心円當て具痕がみられる。

11は大壺の口縁部付近で、櫛描波状文が施されるものである。

第57表 円盤状土製品観察表

種別	番号	出土区	部位	器種	調 整		色 調		胎土	備 考
					外面	内面	外面	内面		
	1	B-21	II a	—	ナデ	ナデ	明赤褐	にふい黄	石英、長石、角閃石	—
	2	B-22	II a	—	ナデ	ナデ	にふい褐	にふい褐	石英、長石、角閃石	—
	3	B-21	II a	—	ナデ	ナデ	黒褐	にふい褐	石英、長石、角閃石	—
	4	C-25	II a	—	ナデ	ナデ	にふい黄	にふい黄	石英、長石、角閃石	—
	5	C-22	II a	—	ナデ	ナデ	灰褐	暗褐	石英、長石、角閃石	—
	6	D-29	I	—	ケズリ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	石英、長石、角閃石	—
	7	B-4	II a	—	ナデ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	石英、長石、角閃石	—
	8	B-22	II a	—	ナデ	ナデ	工具ナデ	にふい黄褐	石英、長石、角閃石	—
	9	B-21	II a	—	陶オサエ	陶オサエ	にふい赤褐	灰褐	石英、長石、角閃石	—
	10	D-22	II a	—	ナデ	ナデ	にふい赤褐	明赤褐	石英、長石、角閃石	—
	11	C-21	II b	—	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	石英、長石、角閃石	—
	12	C-23	II a	—	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	石英、長石、角閃石	—
	13	B-6	II a	—	ナデ	ナデ	にふい黄褐	灰黄褐	石英、長石、角閃石	—
	14	C-21	II a	—	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	石英、長石、角閃石	—
	15	B-21	II a	—	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	石英、長石、角閃石	—
	16	B-33	II a	—	ナデ、ヘラナデ	ナデ、ヘラナデ	にふい黄褐	黒褐	石英、長石、角閃石	—
	17	裏中7	II a	—	ナデ	ナデ	黒褐	黒褐	石英、長石、角閃石	—
	18	B-21	II a	—	ナデ	ナデ	周	にふい褐	石英、長石、角閃石	—
	19	B-22	II a	—	ナデ	ナデ	周	にふい褐	石英、長石、角閃石	—
	20	裏中3	II a	—	ナデ	ナデ	指オサエ	にふい褐	石英、長石、角閃石	—
	21	C-34	II a	—	ナデ	ナデ	灰褐	にふい褐	石英、長石、角閃石	—
	22	A-19	II a	—	ナデ、指オサエ	ナデ	褐	褐	石英、長石、角閃石	—
	23	C-21	II a	—	ナデ、工具ナデ	ナデ	褐	褐	石英、長石、角閃石	—
	24	C-21	II a	—	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	石英、長石、角閃石	—
	25	H-13	土手一括	—	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	石英、長石、角閃石	—
	26	C-21	II a	—	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	石英、長石、角閃石	—

第58表 古代須恵器観察表

種別	番号	出土区	部位・直横	器種	部位	口径 cm	底径 cm	基高 cm	調整・文様		色調	備考
									外 面	内 面		
	1	B-33	II a	坪	口縁部	—	—	ナデ	ナデ	灰	灰	—
	2	B-22	II a	坪	口縁部	—	—	ナデ	ナデ	灰	灰	—
	3	B-33	II a	坪	口縁部	—	—	ナデ	ナデ	灰	灰	—
	4	B-33	II a	坪	口縁部	—	—	ナデ	ナデ	灰	灰	—
	5	B-34	II a	坪	口縁部	—	—	ナデ	ナデ	灰	灰	—
	6	C-32	II a	坪	口縁部	0.4	—	ナデ	ナデ	灰	灰	—
	7	D-22	I	壺	口縁～鋸部	10.4	—	—	ナデ	ナデ	灰	灰
	8	B-C-33	II	壺	鋸部	—	—	ケズリ	ケズリ	灰	灰	—
	9	B-33	II a	壺	鋸部	—	—	格子目タキ	同心円當て具痕	灰	灰	—
	10	B-C-33	II a	壺	鋸部	—	—	格子目タキ	同心円當て具痕	灰	灰	—
	11	C-33	II a	壺	鋸部	—	—	櫛描波状文	ナデ	灰	灰	—
	12	C-30	II a	壺	鋸部	—	—	ナデ	ナデ	灰	灰	—
	13	C-33	II a	坪	底部	—	5.5	—	ナデ	ナデ	灰	灰

第5節 中世以降の調査

1 調査の方法と概要

中世以降の調査は、10m四方のグリッドを設定し、Ⅱ層を中心に全面調査を行った。中世～近世の遺構はⅡb層で検出し、遺物はⅡ層上部（Ⅱa層）からⅡ層中部（Ⅱb層）で大半が出土した。

遺構は、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、土坑墓、石組遺構を検出した。中世の遺構が検出された場所は、主にA～D-20～26区と33～36区である。中世の遺構は、古墳時代の竪穴住居が検出された場所と同じ所から検出されているものが多い。各遺構については、それぞれの遺構のところで後述する。ここではそれぞれの遺構の概要について説明する。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は9棟検出された。主軸方向は南北に位置するものと東西に位置するものがある。形状は、2間間×3間が多い。中には、庇をもつ大型のものも2棟検出されている。遺物は、青白磁や錢貨が出土した。

竪穴建物跡

竪穴建物跡は6基検出された。平面形は、方形のものばかりである。大きさの平均は、長軸約250cm×短軸約200cmである。検出面からの深さは、約40cm～60cmである。竪穴建物跡の中には、大量の炭化物を検出したものもある。これらの結果から考えて、竪穴建物跡の幾つかは何らかの原因からなる火災によって焼失している可能性がある。

溝状遺構

溝状遺構は11条検出された。古墳時代の溝状遺構が、地形に沿って位置しているのに対して、中世の溝状遺構は、南北・東西方向に位置しているものが多い。

土坑

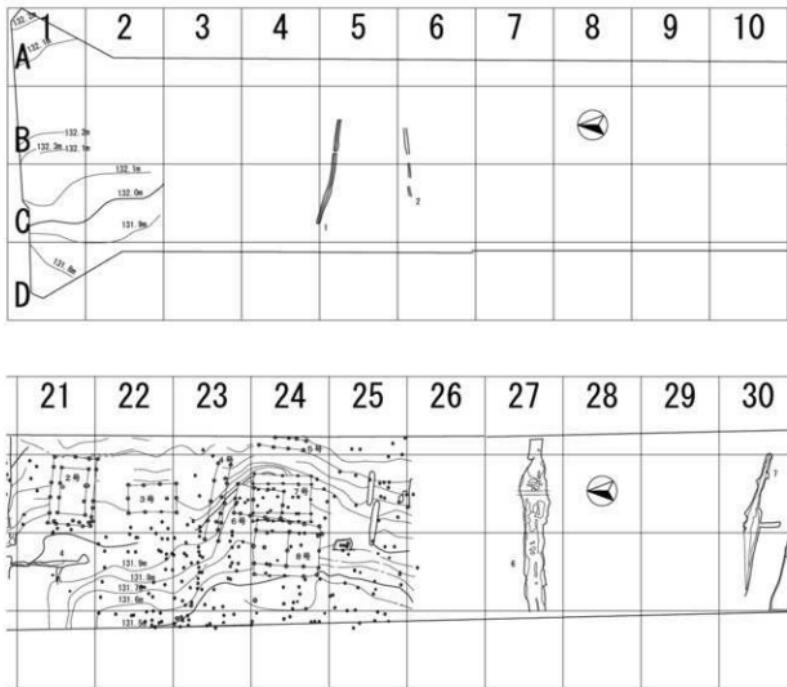
土坑は24基検出された。埋土の堆積状況から、これらの土坑の多くは短期間に埋め戻されたものであると考えられる。

石組遺構

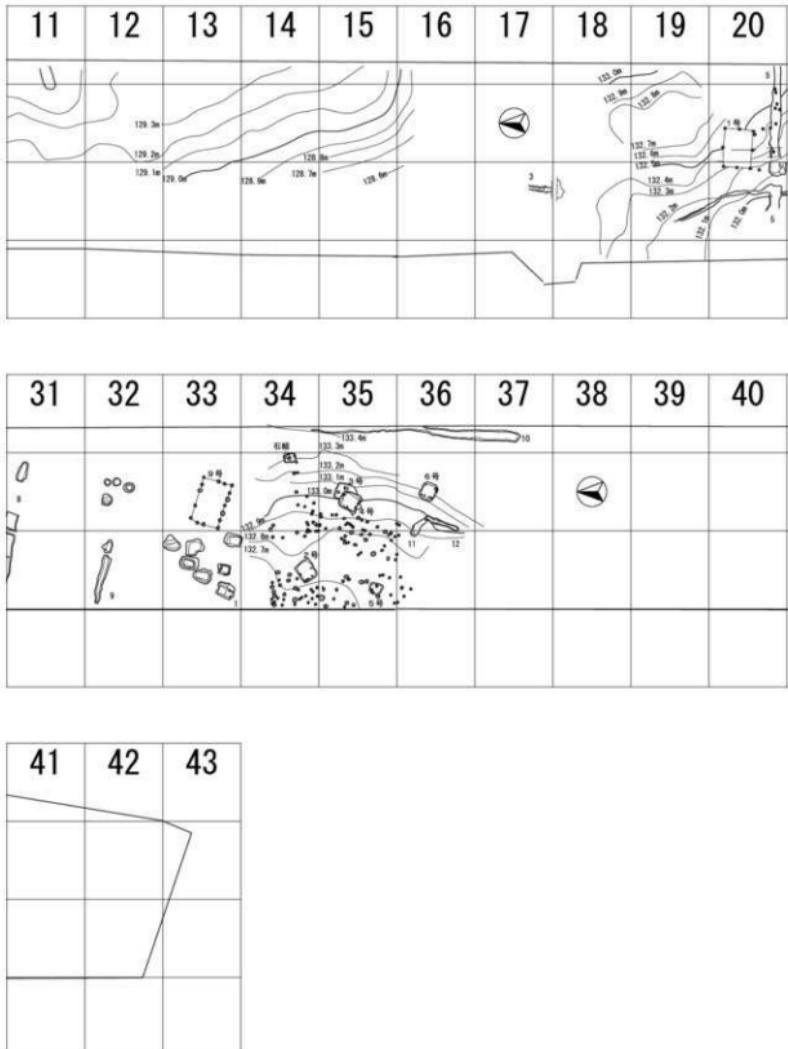
石組遺構は1基検出された。発掘調査の時点では、配石遺構と称していたものである。

土坑墓

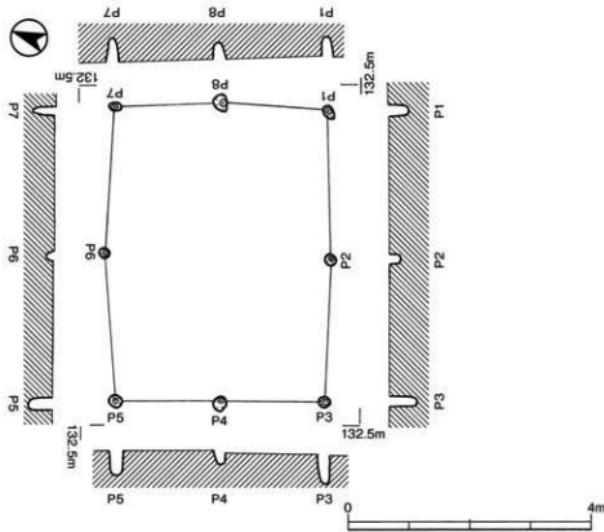
土坑墓は11基検出された。中世以降の時期に相当する。遺物は、土師器、中世須恵器、常滑焼、備前焼、東播磨系須恵器、青磁、青花、滑石製品等が出土している。



第226図 中世遺構位置図(1) 1:625



第227図 中世遺構位置図(2) 1:625



第228図 1号掘立柱建物跡

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は9棟検出された。長軸の位置で分類すると南北を長軸とするものが7棟、東西を主軸とするものが2棟である。

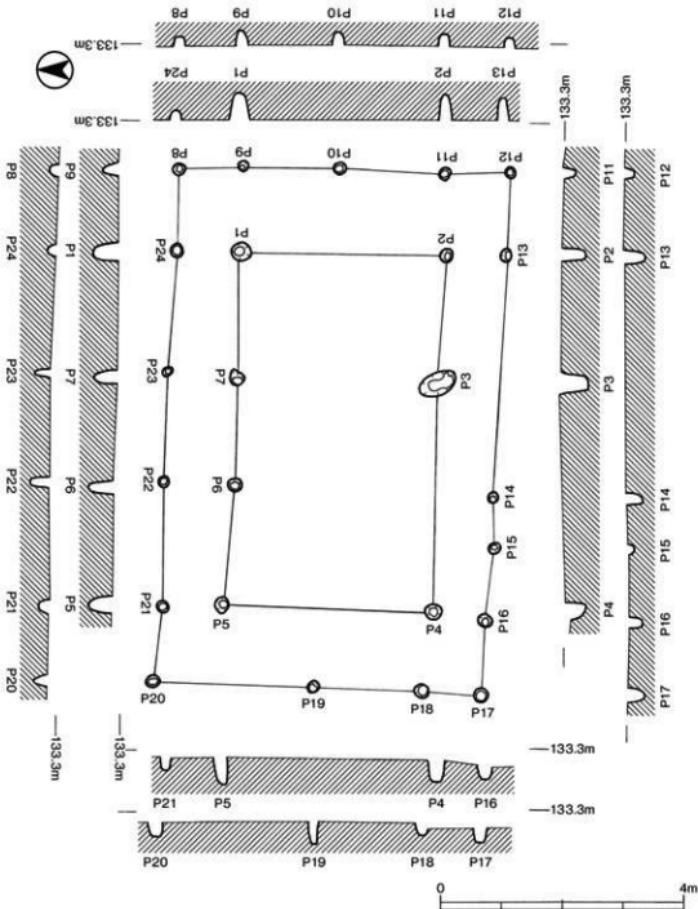
1号掘立柱建物跡(第228図)

B・C-20区、IIb層で検出された。2間×2間を基調としている。長軸方向は、東西に近い方向である。桁行は約480cm、梁間は約360cmを測る。

柱穴の径の平均は約24cmであり、検出面から柱穴の深さの平均は約40cmである。

第59表 1・2号掘立柱建物跡観察表

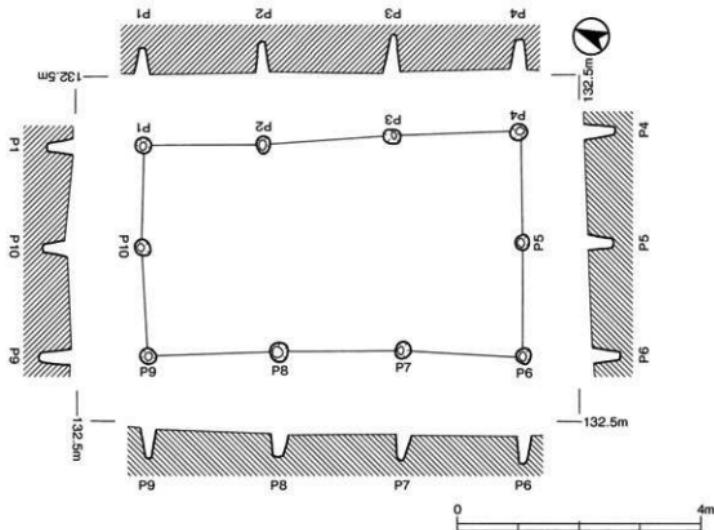
1号掘立柱建物跡		2号掘立柱建物跡	
ピット間	距離(cm)	ピット間	距離(cm)
P1→P2	245	P1→P2	345
P2→P3	235	P2→P3	210
P3→P4	170	P3→P4	375
P4→P5	175	P4→P5	345
P5→P6	240	P5→P6	195
P6→P7	240	P6→P7	175
P7→P8	180	P7→P1	215
P8→P1	175	P8→P9	105
		P9→P10	160
		P10→P11	175
		P11→P12	105
		P12→P13	140
		P13→P14	400
		P14→P15	80
		P15→P16	125
		P16→P17	125
		P17→P18	100
		P18→P19	180
		P19→P20	260
		P20→P21	125
		P21→P22	205
		P22→P23	180
		P23→P24	200
		P24→P8	135



第229図 2号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡(第229図)

B-21・22区、IIb層で検出された。5間×4間を基調としている。四方に庇をもつ建物で、この庇は張り出しや回廊などの用途が想定される。桁行は約850cm、梁間は約320cmを測る。柱穴の径の平均は約24cmであり、検出面からの深さの平均は約40cmである。



第230図 3号掘立柱建物跡



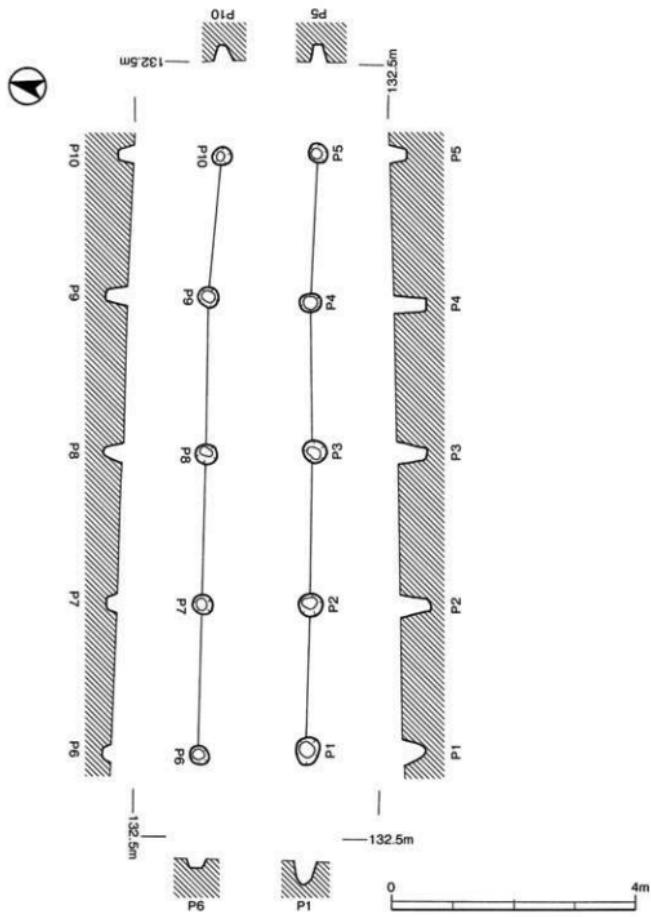
第231図 3号掘立柱建物跡出土遺物

3号掘立柱建物跡(第230図・231図 1)

B-22・23区、IIb層で検出された。2間×3間を基調としている。長軸方向は、南北方向に近い形であり、桁行は約620cm、梁間は、約350cmを測る。柱穴の径の平均は約24cmであり、検出面からの深さの平均は約50cmである。この掘立柱建物跡のピットから、宋銭が出土した。表面に、「元豊通寶」(初鑄1078年)と篆書体で刻印されている。ピットから出土したことから、地鎮に使用されたものではないかと考えられる。

第60表 3～6号掘立柱建物跡観察表

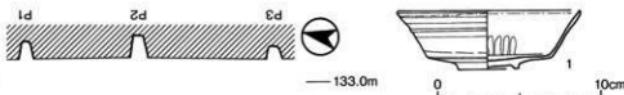
3号掘立柱建物跡		4号掘立柱建物跡		5号掘立柱建物跡		6号掘立柱建物跡	
ピット間	距離(cm)	ピット間	距離(cm)	ピット間	距離(cm)	ピット間	距離(cm)
P1→P2	195	P1→P2	240	P1→P2	185	P1→P2	205
P2→P3	215	P2→P3	250	P2→P3	225	P2→P3	185
P3→P4	205	P3→P4	250	P3→P4	245	P3→P4	210
P4→P5	185	P4→P5	245	P4→P5	190	P4→P5	175
P5→P6	185	P5→P6	245	P5→P6	205	P5→P6	175
P6→P7	200	P6→P7	245	P6→P7	185	P6→P7	200
P7→P8	200	P7→P8	250			P7→P8	190
P8→P9	215	P8→P9	255			P8→P9	210
P9→P10	180	P9→P10	230			P9→P10	180
P10→P1	165					P10→P1	185



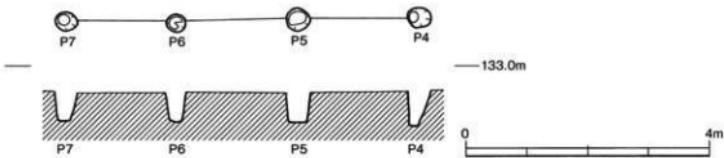
第232図 4号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡（第232図）

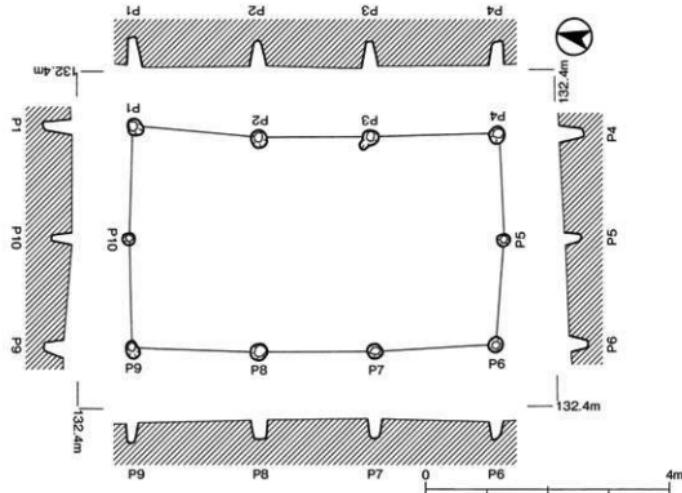
B・C-23区、IIb層で検出された。1間×4間の建物で、長軸の方向は東西方向に近い。5号掘立柱建物と同様に通常の建物とは様相が異なるもので、渡り廊下のような形状である。柵や扉などであった可能性もあるが、ここでは建物として扱った。なお近接して存在する6号及び7号掘立柱建物跡と関連する可能性もある。桁行約600cm、梁間は約120cmを測る。柱穴の径は平均約40cm、検出面からの深さの平均は約45cmである。



第234図 5号掘立柱建物跡出土遺物



第233図 5号掘立柱建物跡



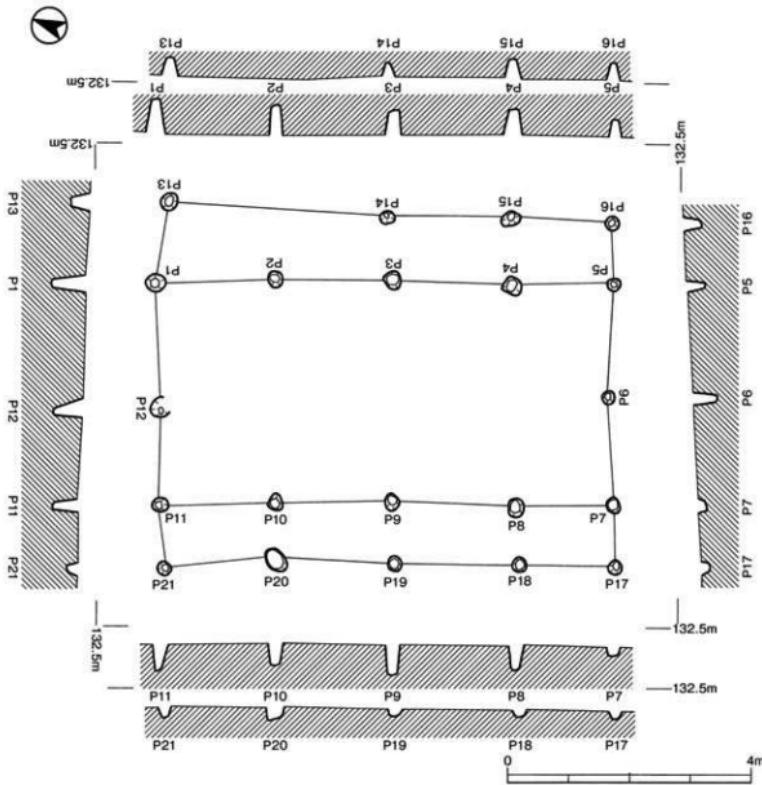
第235図 6号掘立柱建物跡

5号掘立柱建物跡(第233図・234図 1)

A-24区、II b層で検出した。1間×4間で、長軸方向は南北方向に近い。桁行は約80cm、梁間は約140cmを測る。柱穴の径の平均は約40cm、検出面からの深さの平均は約50cmである。青白磁が出土した。口縁部の釉をカキ取り露胎とし、腰折れの形態を有する。また、体部外面に隆帯を巡らす。森田分類の白磁B'類の坯で、14世紀頃に該当する。

6号掘立柱建物跡(第235図)

B-24区、II b層で検出された。2間×3間で、長軸の方向は南北方向である。桁行約60cm、梁間約380cmを測る。柱穴の径は平均約25cm、検出面からの深さの平均は約30cm~40cmである。



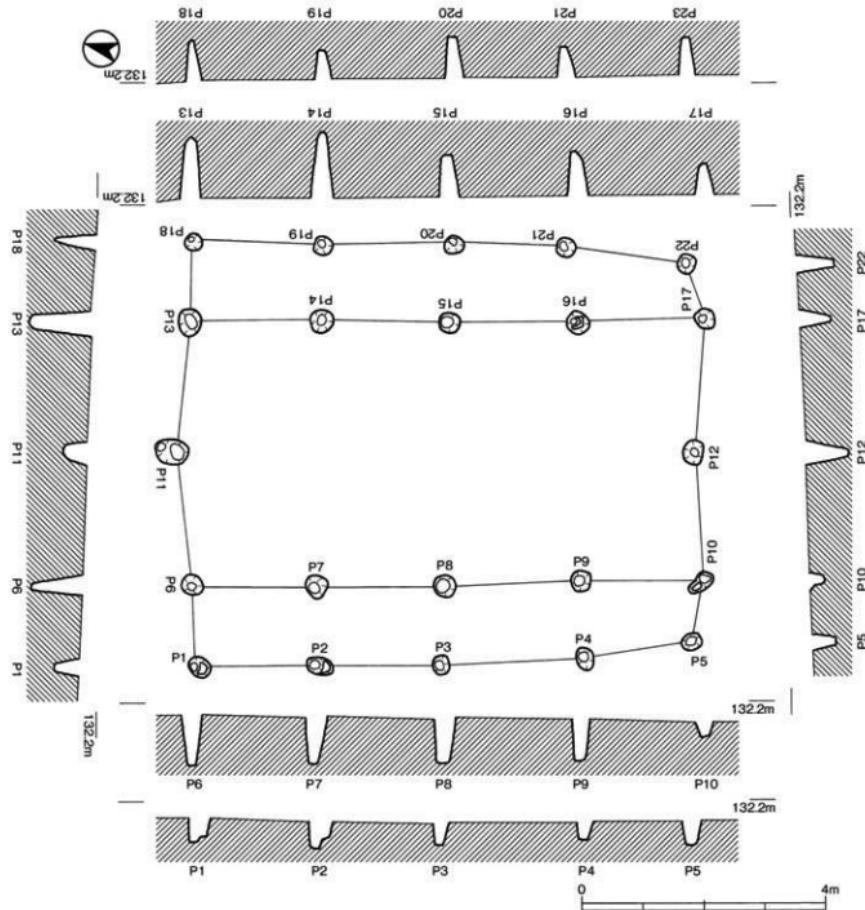
第236図 7号掘立柱建物跡

7号掘立柱建物跡(第236図)

B-23・24区、IIb層で検出された。2間×4間の建物で、東西の二面にそれぞれ庇がつく。長軸方向は、ほぼ南北を示す。桁行約750cm、梁間は約360cmを測る。柱穴の径の平均は約25cm、検出面からの深さの平均は、約40cmを測る。

第61表 7号掘立柱建物跡観察表

7号掘立柱建物跡							
ピット間	距離(cm)	ピット間	距離(cm)	ピット間	距離(cm)	ピット間	距離(cm)
P1→P2	200	P5→P6	185	P9→P10	195	P7→P17	100
P2→P3	195	P6→P7	180	P10→P11	190	P16→P5	100
P3→P4	200	P7→P8	160	P11→P12	155	P1→P13	140
P4→P5	170	P8→P9	200	P12→P1	210	P17→P18	160
P13→P14	220	P14→P15	210	P15→P16	210	P21→P11	105



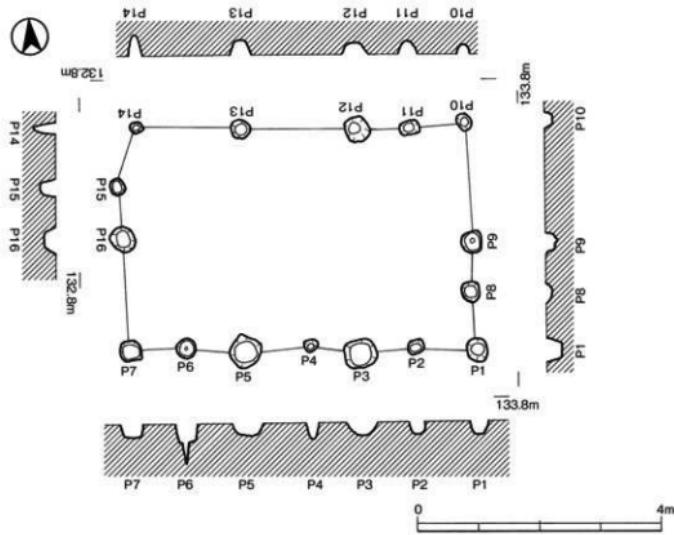
第237図 8号掘立柱建物跡

8号掘立柱建物跡（第237図・238図 1）

B-24区、IIb層で検出された。2間×4間を基調とする。長軸方向はほぼ南北方向であり、桁行は約850cm、梁間は約440cmを測る。柱穴の径の平均は約25cmであり、検出面から柱穴の深さは約40cmである。ピットから古銭が出土した。一部が欠損しているが「元○通寶」と判読できる。元豐通寶・元祐通寶・元符通寶（全て北宋銭）のいずれかであろう。



第238図 8号掘立柱建物跡出土遺物



第239図 9号掘立柱建物跡

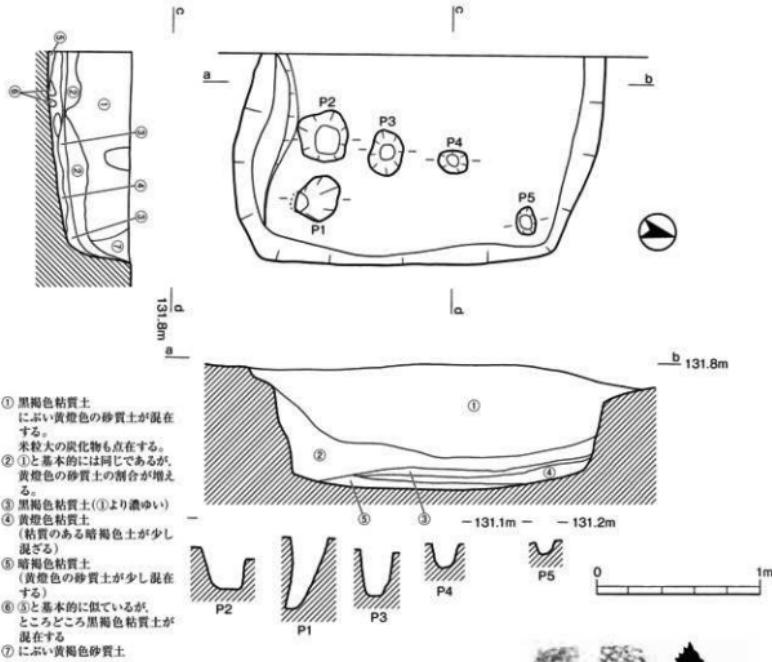
ピットから出土したことから、地鎮に使用されたものではないかと考えられる。

9号掘立柱建物跡 (第239図)

B-33区、IIb層で検出された。2間×3間の建物で長軸の方向は、東西に近い。桁行約570cm、梁間は約370cmを測る。柱穴は径の大きいものと小さいものがあり、平均は約45cmである。ピットの深さは径が大きいものは深く、小さいものは浅い傾向にある。柱穴の埋土は、黒褐色のIIa層である。埋土中には文明ボラとみられる白色のパミスなどが混入している。

第62表 8・9号掘立柱建物跡観察表

B号掘立柱建物跡		9号掘立柱建物跡	
ピット番	距離(cm)	ピット番	距離(cm)
P1→P2	200	P1→P6	130
P2→P3	205	P6→P11	225
P3→P4	240	P13→P14	215
P4→P5	180	P14→P15	210
P5→P10	105	P15→P16	210
P6→P7	200	P16→P17	210
P7→P8	210	P18→P19	215
P8→P9	225	P19→P20	215
P9→P10	210	P20→P21	185
P10→P12	210	P21→P22	205
P12→P17	220	P17→P22	100
P11→P13	215	P13→P18	135
P12→P17	220		
P11→P13	215		
		P14→P15	105
		P15→P16	90
		P13→P14	175



第240図 1号竪穴建物跡



第241図 1号竪穴建物跡出土遺物

竪穴建物跡

1号竪穴建物跡 (第240図)

D-25区、II b層で検出された。西側の一部が調査区外になっており、全体の形状を確認することはできなかった。残存するプランは、長軸約215cmであり、方形を呈すると推定できる。長軸方向は南北である。検出面から床面までの深さは、約40cmを測る。床面には、硬化面が形成されてはいなかった。5基のピットが検出されたが、P1→P2、P2→P3、P3→P4の距離は、それぞれ約45cmであり等間隔である。配列はやや直線上に並ぶ。このことから考えて、この遺構に伴う柱穴の可能性がある。しかし、西側の一部が調査区外であるため、柱穴になるかどうかは不明である。埋土は中世の包含層である、II b層の黒色土を主体として、III層のアカホヤがブロック状に混入している。

遺構内から中世須恵器が出土している。埋土の状態から、この遺構の時期は中世であると考える。

1号竪穴建物跡出土遺物 (第241図 1)

1は樺万支系の須恵器である。内面は摩耗していて調整は不明である。外面の器面調整は、格子目タタキである。